巻　頭　言

21 世紀の扉が開かれて 13 年が経過した今，日本の教育界は教育改革の渦中にある。21 世紀には，地球環境問題，エネルギー・食糧問題など人類の生存基盤を脅かす諸問題がより一層深刻化するとともに，情報化・グローバル化の波もさらに加速することであろう。そのようななかで，日本の教育界は今，学力の質が問われている。すなわち，旧来の知識詰め込み型の学力観を脱却し，21 世紀型学力の育成が求められている。では，21 世紀型学力を育成するための 21 世紀型教育とは，いったいどのような教育なのだろうか。

この重要な問いに対する答えを提示できるのは，おそらく学習科学以外にはあり得ないであろう。なぜなら学習科学は，1980 年代以降，急速に発展しつつある学際的科学であり，「学習と教育に関わる多様な学問分野の知見を総合し，科学的根拠に基づいて教育実践の改善を目指す新しいパラダイム」だからである。もちろん，学習科学が出現する以前にも学習に関する科学的研究はなされていた。例えば学習の仕組みの解明を目指す「学習心理学」には，すでに 100 年以上の研究史がある。この学習心理学の学習観は「知識獲得モデル」といえるだろう。これに対し，学習科学の学習観は「知識創造モデル」といえる。そもそも知識とは継承し共有されていくものであり，継承したものに何らかの創造が付加されなければ，継承されることなく朽ち去る運命にある。したがって，豊かな未来を創造するためには文化創造の営みが不可欠であり，それを可能にするのが「知識創造」の営みである。つまり，学習科学が目指す 21 世紀型学力とは，文化を「継承」しつつ「共有」し，さらに「創造」へとつなげる「知識創造モデル」の学習を生涯にわたって継続する力にほかならない。そうした知識創造の学びがなされる学習環境をデザインし，そのための教育方法を科学的根拠に照らして研究・開発することが学習科学の研究課題なのである。

本誌『学習開発学研究』の編集方針は学習科学の理論的枠組みに依拠している。したがって，本誌が学習科学の発展に寄与し，教育改革の一助となることを願って止まない。

平成 26 年 4 月

広島大学大学院教育学研究科
学習開発学講座　　森　　敏昭